1
かくてわれわれに明らかとなったように、善者の本性は単純で、したがってまた第一位であるいものは、単純ではないだからの——

——というのは、すべて第一位ではないものは、何か一つのものであり、したがって、一者とだけれでいるものの本性も、これと同じものでのこで、

そして自己の内なに何ものかを含有しないで、何か一つのものであり、したがって、一者とだけれでいるものの本性も、これと同じものでのこで、

かくして、われわれが「一者と言うが故に、何かが一者と言うだけあいも、「善者」と言うが故に、何かが善者と言うだけあいも、同一のあり方をしているのと理解されなければならない

かくて、それが他者から決定されないのでもなく、他者の内にあるのでもなく、またいかなる意味においても複合体ではなく、それゆえ上位には何も存在しないということが、必然である

それゆえ、別の始原をさらに求める必要はない。これをこそ真っ先に立て、それからこれの次に第二、つまり第一義的に直知しているものを、それから次に第三、つまり第一義的に直知しているものを、と順序を追って立てるならば、もはやそれ以上には何も存在しないということが、必然である

他方もし、これら三者よりさらに多くの原理が立てられるべきであるとするならば、どうかこれをこそわれわれは考慮しなければならない

直知界において

ナグ・ハマディで1945年にコプト語で書かれたグノーシスの諸文書が発見されたことにより、グノーシスがキリスト教とは別に発展したと考えられるようになったことを考慮すると理解が深まる

『ヴェーダンタ思想の展開』中村元選集第27巻（春秋社

つまり、われわれはこのばあいに、かのものにいかなる限定をも付加されてはならないのだからであり、

同じ意味であた、われわれはそれを「第一の者とも呼ばれている」まだ「自足者」とも呼んでいるのである。また、われわれはそれを「他者の内にあるのでもない」とも言うだけでなく、すべて他者の内にあるものは、他者から派生したのでもあるのだからである

なぜなら、もし人人が少なくものを直ではなく、彼らは、魂とヌースとが同一のものであるとも主張するか、それとともヌースと第一者とを同一のものとするか、どちらかであるだろう。それゆえ、これら三者は、真に第一位のものであるとも言うだろう。

だが、これらのほかに、どのような本性のものがありうるであろうか、というのは、今説明されたような本性をもつ万物の始原よりも、もっと単純で、もっと上位の何ものかをわれわれは考えることができないのであるから。

だが、これらのほかに、どのような本性のものがありうるであろうか、というのは、今説明されたような本性をもつ万物の始原よりも、もっと単純で、もっと上位の何ものかをわれわれは考えることができないのであるから。

というのは、むろん第1は、始原のあるものは可能態にとあり、他のものは現実態としてあるからである。

というのは、むろん第1は、始原のあるものは可能態にとあり、他のものは現実態としてあるからである。

なぜなら、つねに現実態で存在する無条件の善性を持ったものだからである。

なぜなら、つねに現実態で存在する無条件の善性を持ったものだからである。

いったいヌースの次静とは何であろか。また運動とは、進行とは何であろか、あるいは、一方の無為とは何で、他方の仕事とは何であるか

いったいヌースの次静とは何であろか。また運動とは、進行とは何であろか、あるいは、一方の無為とは何で、他方の仕事とは何であるか

魂は運動している

グノーシス派はヌースと魂の中間者に相当するものとして、多数のアイオーンなるものを置いている

なぜなら、たとえわれわれの経験内において、真知識と直知識とは、別のものであるからである

なぜなら、たとえわれわれの経験内において、真知識と直知識とは、別のものであるからである

ましてや真正のヌースはなおさらである

ましてや真正のヌースはなおさらである

さらにまた、直知するヌースとその知られるものとは、数化すること

さらにまた、直知するヌースとその知られるものとは、数化することもできないであろう

さらにまた、直知するヌースとその知られるものとは、数化することもできないであろう

しかし、もし彼らが、われわれの思考と（概念的に、両者は区別されうる）主張するのであれば、まず第一に、複数の存在を認めるに至るであろう。

しかし、もし彼らが、われわれの思考と（概念的に、両者は区別されうる）主張するのであれば、まず第一に、複数の存在を認めるに至るであろう。

また第二に、たとえ思考上にもせよ、単に直知するだけで直知する自己に気づかないヌースというのが存在しうる余地があるかどうか考慮しなければならない

また第二に、たとえ思考上にもせよ、単に直知するだけで直知する自己に気づかないヌースというのが存在しうる余地があるかどうか考慮しなければならない

否、これは、その次の領域においてすら、あるひとつの知識の複数と静止と運動とが、同時に存在しうるからである。

否、これは、その次の領域においてすら、あるひとつの知識の複数と静止と運動とが、同時に存在しうるからである。

というのは、ヌースは現にあるふうに、常に同一的にあり、不動の活動状態において存在しているのであるから

というのは、ヌースは現にあるふうに、常に同一的にあり、不動の活動状態において存在しているのであるから

なお、ヌースに向かう、あるいはそれの周囲をめぐる運動は、これはすでに魂や他の諸々の知識と同じく、ヌースから魂に送られた印象であり、

なお、ヌースに向かう、あるいはそれの周囲をめぐる運動は、これはすでに魂や他の諸々の知識と同じく、ヌースから魂に送られた印象であり、

しかし、もし彼らが、われわれの思考と（概念的に、両者は区別されうる）主張するのであれば、まず第一に、複数の存在を認めるに至るであろう。

しかし、もし彼らが、われわれの思考と（概念的に、両者は区別されうる）主張するのであれば、まず第一に、複数の存在を認めるに至るであろう。

また第二に、たとえ思考上にもせよ、単に直知するだけで直知する自己に気づかないヌースというのが存在しうる余地があるかどうか考慮しなければならない

また第二に、たとえ思考上にもせよ、単に直知するだけで直知する自己に気づかないヌースというのが存在しうる余地があるかどうか考慮しなければならない

まして真正のヌースは、直知において自己を直知し、その直知対象は彼の外部にあるのではなく、彼自身が直知対象であるならば、必然的に、彼は直知において自己を把握し、自己自身をも知るであろう

まして真正のヌースは、直知において自己を直知し、その直知対象は彼の外部にあるのではなく、彼自身が直知対象であるならば、必然的に、彼は直知において自己を把握し、自己自身をも知るであろう

さらにまた、直知するヌースとその知られるものとは、数化することもできないであろう

さらにまた、直知するヌースとその知られるものとは、数化することもできないであろう

またヌース（原理）にしても、もしだれかがこれをヌースから出たものとして、そしてこれから、つまり原理本体からも一つ別の原理が導かれるとするならば、それもまた、そのばあいに、

またヌース（原理）にしても、もしだれかがこれをヌースから出たものとして、そしてこれから、つまり原理本体からも一つ別の原理が導かれるとするならば、それもまた、

2
それゆえ、これら以上多くのものをも、またかの世界のものたちが受け付けもしない会話を思考上の区分をも、かの世界に欲けではないであろ、たとえ、常に同一者で同一状態にあり、どの方向にも傾くことなく、その父をまた自己のうちから限りに模倣しているヌースをさえ立てるべきである

2
それゆえ、これら以上多くのものをも、またかの世界のものたちが受け付けもしない会話を思考上の区分をも、かの世界に欲けではないであろ、たとえ、常に同一者で同一状態にあり、どの方向にも傾くことなく、その父をまた自己のうちから限りに模倣しているヌースをさえ立てるべきである

他方われわれの魂についても、次のように考えるべきである、すなわち、それは、

他方われわれの魂についても、次のように考えるべきである、すなわち、それは、

そして第1の——部分は、前二者の中間に位置する、というのは、われわれの魂はつねに多くの本性ではあるが複数の能力を有していて、ある時には魂全体が自己の最良部分と有るものの最良部分に、たがて取むのだが、ある時には魂の劣った部分が下方へ引きずられ、中間的部分をも一緒に引きずるのである

そして第1の——部分は、前二者の中間に位置する、というのは、われわれの魂はつねに多くの本性ではあるが複数の能力を有していて、ある時には魂全体が自己の最良部分と有るものの最良部分に、たがて取むのだが、ある時には魂の劣った部分が下方へ引きずられ、中間的部分をも一緒に引きずるのである

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

また、富と貧困や、この種のすべてのものの配分の不平等を非難する人々がおるならば、

また、富と貧困や、この種のすべてのものの配分の不平等を非難する人々がおるならば、

第一に、このような次元をも知らないのである

第一に、このような次元をも知らないのである

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

また、富と貧困や、この種のすべてのものの配分の不平等を非難する人々がおるならば、

また、富と貧困や、この種のすべてのものの配分の不平等を非難する人々がおるならば、

第一に、このような次元をも知らないのである

第一に、このような次元をも知らないのである

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

キリストがわれわれの魂の一部でありながら、下方にとどまって、世界を管理するというイメージの中石なのだろうか？

キリストがわれわれの魂の一部でありながら、下方にとどまって、世界を管理するというイメージの中石なのだろうか？

感性界にある世界を身体にみたて、直知界に静止した魂どこれを管理するということ

感性界にある世界を身体にみたて、直知界に静止した魂どこれを管理するということ

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

魂はヌースの支配のもとに従属しているものの、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

そしてこの災いが魂にふさわしくあるべきであるから、

また、富と貧困や、この種のすべてのものの配分の不平等を非難する人々がおるならば、

また、富と貧困や、この種のすべてのものの配分の不平等を非難する人々がおるならば、

第一に、このような次元をも知らないのである

第一に、このような次元をも知らないのである